

成田山の天狗のお面

志茂田景樹



作家。1940年静岡県生まれ。1976年に『やっとな探偵』で小説現代新人賞を受賞し、1980年に『黄色い牙』で直木賞を受賞。最近には「よい子に読み聞かせ隊」を結成し、絵本の読み聞かせ活動をを行っている。

昭和19年（1944）の秋、4歳の僕は父に連れられて千葉県の成田方面にあった大蔵省税務講習所（現税務大学の前身）で寮生活を送る兄に会いにいった。兄とは15歳も年が離れており、父や、母に言わせると、当時、虚弱だった僕を兄はいつも気遣っていたという。

面会室だったのか、がらんとした部屋に置かれたテーブルで僕は父の膝に乗って兄と向き合っている。母が作ってくれたお赤飯を食べた。しかし、この記憶よりも鮮やかに覚えているのは、成田山新勝寺の縁日の光景である。

父は兄と面会した後、僕をその縁日に連れていってくれたのだ。ぞろぞろ歩いていて人の多いことに、まず性（せう）む（む）感（かん）で気を吞まれた。何だっただかにはよく思い出せないが、屋台の店にいろんな商品がたくさん置かれていることにも驚いた。

すでにどこの店からも商品がなくなっていることに子ども心に気づいていて、屋台や、地べたに莫（も）産（さん）を敷いての商（あ）いにしろ、ここにはあるなあと感嘆したのかもしれない。商品の多くは野菜穀類、駄菓子類、古着などの衣類だったかもしれない。

お面をいっぱい飾って並べた屋台の前で僕は足を止めた。それで父も気づいて足を止め、ほう、お面か、とつぶやいた。父によると、僕は僕の背より大分高い位置に飾られた天狗のお面を凝視したらしい。鼻が反り返りながらニューツと長く高く、どぎついほどの赤色に塗られたそのお面は僕の視線を釘づけにしたようだった。

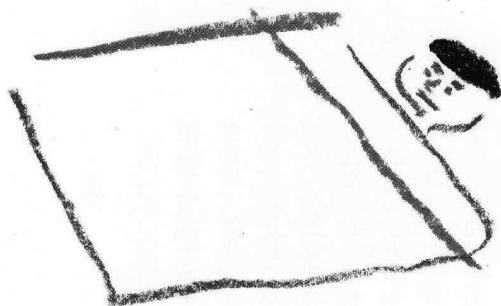
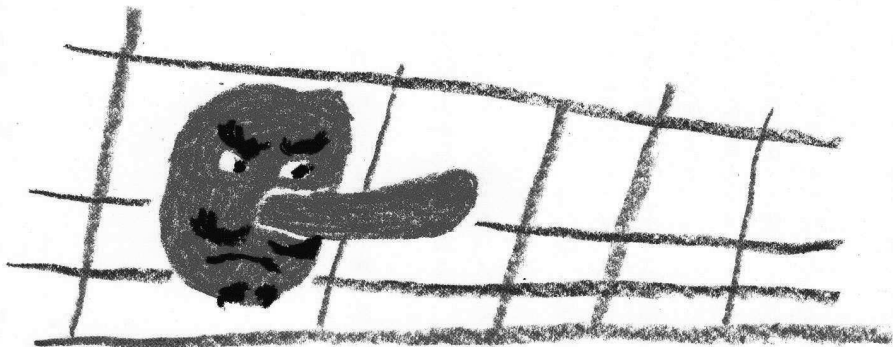
「気に入ったか。買ってやろう」
天狗のお面は古い新聞紙に包まれ、細紐で結わえられて父に渡された。父はそれを、持つか、と

僕に差し出した。
僕は、いったん受け取りながら、なぜか振り捨

てた。
「おかしなやつだな」
父は首を振りながら、拾い上げた。
天狗のお面は寝間の置床の上方の壁に飾られた。僕より8歳と12歳年長の姉たちは別の部屋に寝て、その寝間で僕は両親の間、つまり、川の字に寝るのが、多分、戦争が終わるまでは続いた習慣だった。

その夜、僕は天狗のお面が夢に出てきてうなざれ、上半身を起こした。壁のお面を凝視した。次の瞬間、僕は声をかすらせて叫んだ。
恐怖のあまり声にならなかった、と言ったほうが正しい。

天狗のお面が壁から離れてこっちへ迫り、静止



したのである。僕は全身を凍りつかせた。

「うわあっ」

僕は叫びながら勢いよく後ろへ倒れた。天狗の

鼻が一気に伸びてきて、

僕のおでこを突いたので

ある。

叫んだ、と言っても、

やはり、声は出なかった

のだろう。声が出ていれ

ば、父も母も目を覚まし

たに違いない。

天狗のお面は元の位置

に戻っていた。僕は改め

て凝視した。黒く縁どら

れた両目の中の黒い瞳に

は勿論、丸い穴が開けら

れている。その穴から何

かが噴き上げてくるよう

な気配があった。

僕は母の布団に潜り込

み母にしがみついた。そ

れはうなされたときの僕

の癖だった。母はそれで目を覚まし、でも、半分、

寝ぼけたような声で、

「悪い夢を見たのね。よしよし、もう大丈夫だよ。

大丈夫だから、ゆっくり寝るんだよ」

と、僕を抱きしめてくれた。

夢じゃないよ、と僕は心で反問しながら、安心

して気がついたら朝だった。天狗のお面に恐怖の底に突き落とされたことは父にも母にも話さなかった。

幼い子どもだったけど、信じて貰えないだろう

と思ひ込んでいたのだろうか。それとも、敗色が

濃厚になり一億玉砕が叫ばれた頃のことで、

臆病に思われたくないと思案を張ったのだろうか。

その夜も、うなされた。壁を見ると天狗のお面

がない。それで、泣いた。このときは火の点いた

ように泣いたようで、父も母も相次いで目を覚ま

した。僕は天井を見上げてさらに泣き募った。

「天狗、天狗……」

天狗の面は天井にはりついて僕を見下ろしてい

た。

「天狗はそこよ」

母は天狗のお面の定位置の壁を指差した。

「そうか、あのお面にうなされたのか」

父は壁へ歩いて天狗のお面の定位置に手を伸ば

したようだった。天井から天狗のお面はパッと消

えた。

その天狗の面が壁に飾られることは二度となか

った。後で知ったことによると、次の日曜日に戻

ってきた兄が寮に持ち帰ったという。

兄は翌昭和20年春に渋谷税務署に奉職したもの

の10日足らずで兵隊に取られて満州へ送られ、終

戦の月に20歳で戦死している。

天狗の面は兄に祟ったんだ、と小学生時代の僕

はよく思い、申し訳ない気持ちになった。